

大正から昭和まで 今も残る古い建物



昭和 57年(1982年)頃: 西町インターナショナルスクール



昭和 57年(1982年)頃: 松方ハウス



昭和 57年(1982年): 安藤記念教会



平成 23年(2011年): 西町インターナショナルスクール



平成23年(2011年): 松方ハウス



平成 23年(2011年): 安藤記念教会

西町インターナショナルスクール

西町インターナショナルスクールの中心、松方ハウス(写真中)はアメリカ人建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計により大正 10 年(1921 年)に松方正熊と妻美代子の私邸として建てられ、ここでこのスクールの創立者・松方種子や、駐日アメリカ大使ライシャワー夫人となる春子が育つ。その後、各国の公使館、大使館として使用された。昭和 40 年(1965 年)からはスクールの教室および教職員室として活用された。東京都選定歴史的建築物であり、改修工事は行われたが、建物は昔のままである。



平成26年(2014年): 和朗フラット

和朗フラット

麻布台の裏路地の一角に、和朗フラット一号館・二号館・四号館が戦災を免れ、今も残る。古くからこの一角はスペイン村ともいわれ、一帯はモダンな雰囲気醸し出している。和朗とは「ここに縁ある人が和やかに朗らかに」過ごせるようにとの願いを込めてつけられたとの事。

竣工: 昭和11年(1936年)頃
設計: 上田文三郎 木造アパート

南部坂教会

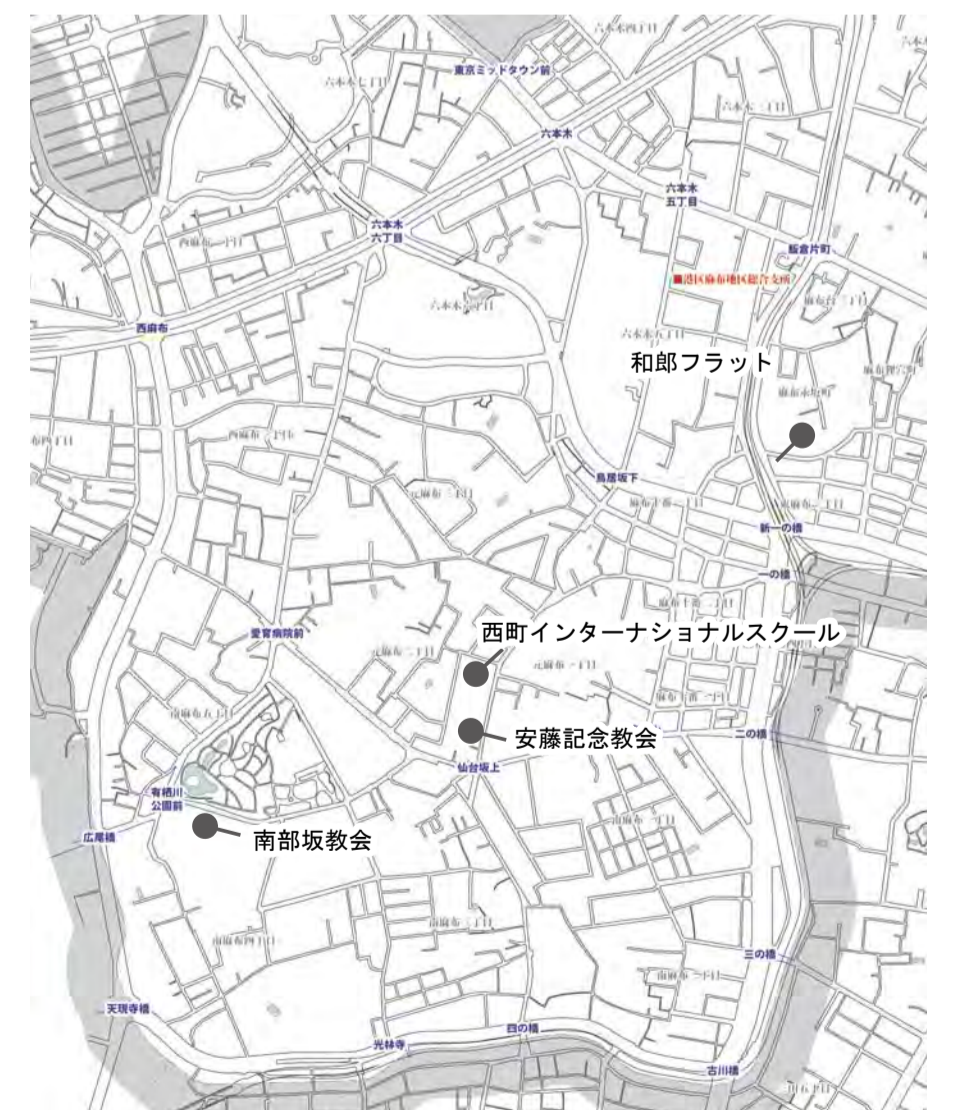
有栖川宮記念公園の向かい側、南部坂に面して建つプロテスタント教会。大正 7 年(1918 年)竣工の木造建物。改修工事が行われ、現在も現役で使用されている。窓や入り口の形にも特徴がある。



平成26年(2014年): 南部坂教会

安藤記念教会

安藤太郎が駐ハワイ総領事時代に文子夫人とともにクリスチャンとなり、帰国後、大正 6 年(1917 年)、自宅をふくめた全てを教会として献げた。後ろの青い三角屋根のところが大正 12 年(1923 年)に開設された付属幼稚園。建物は今でも当時の姿をとどめている。昭和 57 年(1982 年)には日本建築学会より大正・昭和戦前に建てられた貴重な二千棟のひとつに選ばれた。



麻布地区は、戦災や、その後の開発により、古い建物が失われている。麻布未来写真館では、現在まで残されている貴重な建物を訪れ、写真に収めている。その中から、西町インターナショナルスクール、安藤記念教会、和朗フラット、南部坂教会を取り上げた。

このパネルに掲載されている古い写真について / 写真提供: 小山 浩 氏

武家屋敷・お屋敷跡



平成 26年(2014年)：毛利庭園



平成 27年(2015年)：鳥居坂上



平成 27年(2015年)：麻布郵便局



平成 7年(1995年)：ニッカ池



平成27年(2015年)：鳥居坂下



平成 27年(2015年)：麻布小学校

六本木ヒルズ・毛利庭園付近

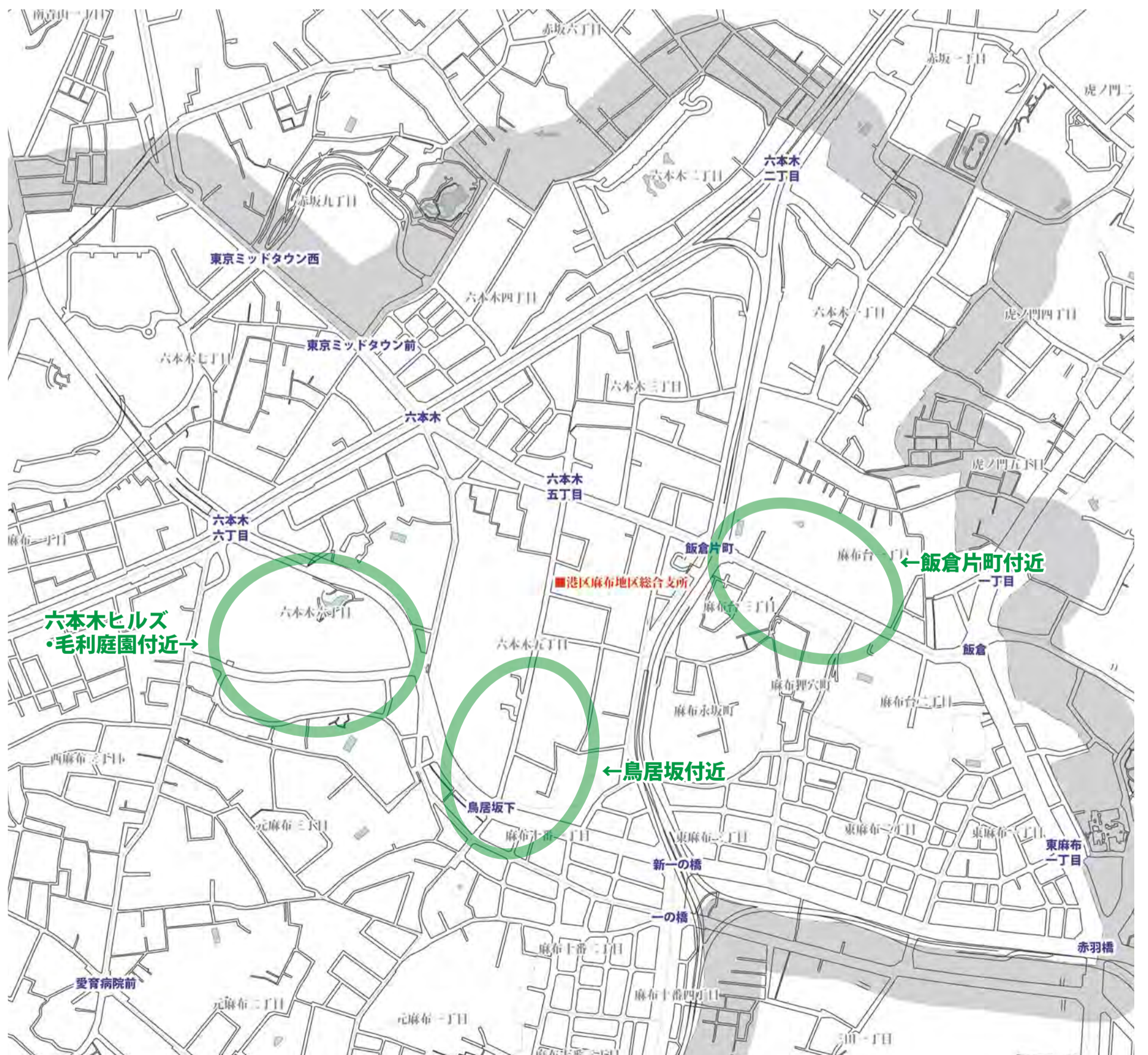
この地には長門府中藩*毛利家の上屋敷が置かれた。明治20年(1887年)、増島六一郎(中央大学初代校長)の邸宅となる。昭和27年(1952年)にニッカウキスキー東京工場、明治52年(1977年)にはテレビ朝日の敷地となった。平成15年(2003年)に六本木ヒルズがオープン、現在の毛利庭園が誕生した。(*現在の山口県下関市一帯)

鳥居坂付近

六本木5-11,5-12の間に位置する鳥居坂の付近は江戸時代、大名や武家屋敷が並ぶ一方、坂下には町人の町が並ぶような地形的配置となっていた。かつて大名屋敷であった広大な土地が、明治維新後、財閥等に払い下げとなり、三井、三菱、住友の三財閥の関係者、三條邸をはじめとする公家や、李王家、久邇宮家などの宮家、といった華族邸が並んでいた。慶長の初期に鳥居彦右衛門元忠が坂下から見て東側に屋敷を拝領していた。また一説では氷川神社の二の鳥居あるいは三の鳥居があったとも言われる。

飯倉片町付近

港区麻布台一丁目、飯倉片町交差点付近には、江戸時代、米沢藩上杉家の中屋敷があった。明治時代より現在の日本郵政グループ飯倉ビル、外務省飯倉公館・外交史料館、麻布小学校の一角には、紀州徳川家の邸宅があった。邸内に「南葵文庫」「南葵楽堂」が開設され、一般にも公開されていた。ここに設置されていたパイプオルガンは関東大震災後、旧東京音楽学校(現在の東京芸術大学)に寄贈され、今も同大学、奏楽堂に設置されている。



南葵文庫及び南葵楽堂と南葵音楽文庫①

麻布飯倉の地に、明治・大正時代に紀州徳川家の屋敷が置かれていた。

その時期の当主は徳川茂承(もちつぐ)、頼倫(よしみち)、頼貞(よしさだ)3世代にわたっていたが、特に第15代頼倫、第16代頼貞親子は近代日本における図書館、そして日本初の音楽図書館を設立し、先駆的な存在として意義深い活動を行った。彼らの活動と意義、その後を辿る。

明治41年(1908年)、徳川頼倫侯爵邸の一部、現在の麻布小学校の地に設置された南葵文庫が一般公開された。これは公立図書館の設立が徐々に増えていく中で、私設しかも個人による設立は希有な例であった。(同年11月に東京市立日比谷図書館が開館、翌明治42年(1909年)東京市立深川図書館が開館。)

それに先立つ明治29年(1896年)、頼倫は、伏見宮貞愛親王の随従としてロシア皇帝ニコライ2世の戴冠式に参加し、その後ケンブリッジ大学に2年間学ぶ。その英国滞在中及び帰国時の欧米諸国の視察により、図書館が重要な役割を果たしている様を見て、図書館建設及び運営を強く決意したのであった。帰国後の明治31年(1898年)には家蔵の書物の整理を指示し、図書館設立準備を始め、公開に至ったのであった。



平成28年(2016年):麻布小学校

南葵文庫についての研究を続け、「南葵文庫 目学問・耳学問」という著書にまとめた坪田茉莉子氏によれば、南葵文庫の意義として

1. 先祖伝来の蔵書を一般公開した事
2. 図書館活動を通し、一般の人々の啓発に努めた事
3. 理想的な図書館建築を具現化した事
4. 利用者の意見を積極的に取り入れて図書館運営を行った事

以上、4点を挙げている。南葵文庫と由来を同じくする徳川家康御譲本(おゆずりぼん)を基礎とする尾張徳川家蓬左文庫の公開はさらに数十年先の事であり、また当時の社会状況(子供の就学率、女性の地位、図書館数及び設備)を考えると、運営利用者の意見を聞く款話会や読書会、児童会など社会教育的イベントを開催し、きわめて先進的な取り組みであった。

南葵文庫については以下のサイトを参照
麻布地区の地域情報紙「ザ・AZABU第17号」
<http://www.city.minato.tokyo.jp/azabuchikusei/azabu/koho/documents/vol17-p01-p08.pdf>



南葵楽堂については以下のサイトを参照
麻布地区の地域情報紙「ザ・AZABU第18号」
http://www.city.minato.tokyo.jp/azabuchikusei/azabu/koho/documents/vol18_the_azabu.pdf



南葵文庫及び南葵音楽図書館(文庫)共に貴重な図書館であったが、大正12年(1923年)9月1日に起きた関東大震災により運命が変わった。東京帝国大学の図書館が震災後の火災により、図書館の蔵書をほぼ消失した。頼倫はこの事態を憂慮し、大学図書館復興のため南葵文庫の蔵書一切を寄贈した。東京帝国大学に寄贈された蔵書は9万冊余り、質・量ともに同大学図書館の根幹をなすものになったという。建物については旧館部分のみ移築され、それ以外は取り壊された。その旧館部分は大磯の徳川別邸に移築された後、改築されVILLA DEL SOL(太陽の館)と名付けられた。その後、旧野村財閥の創始者の手に渡り、取り壊しが検討された後、熱海老舗旅館「蓬萊」の尽力により取り壊しを回避され、長らく別館として使用された。現在は民間ホテルに渡り、宿泊も可能である。

参考サイト:『南葵音楽文庫』(読売日本交響楽団) <http://yomikyoku.or.jp/nanki/>
『麻布飯倉 南葵楽堂の記憶』(音楽フロンティアみなと 再発見コンサート実行委員会) <http://nankigakudo.blog60.fc2.com/>
『南葵音楽文庫資料紹介 「南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴」』(篠田大基) <https://note.mu/hshinoda/n/n8a02f80dffdc>
『南葵音楽文庫の出版活動』(篠田大基) <https://note.mu/hshinoda/n/nc4a6a85d3340>

南葵文庫及び南葵楽堂と南葵音楽文庫②



平成28年(2016年): パイプオルガンが移設された旧東京音楽学校奏楽堂

以下のサイト上において、パイプオルガンの音色を試聴できる。

文化探訪 台東区文化ガイドブック「旧東京音楽学校奏楽堂を歩く3」
http://www.taito-culture.jp/history/sogakudo/japanese/sogakudo_guide_03.html



以下のサイト上において、南葵音楽文庫の一部が閲覧できる。

南葵音楽文庫所蔵貴重資料デジタルアーカイブ
<http://note.dmc.keio.ac.jp/music-library/nanki/>



南葵文庫及び南葵楽堂に関する略年譜

明治 6 年(1873 年)	7月	麻布飯倉の上杉茂憲伯爵の旧中屋敷を購入。
明治 29 年(1896 年)		頼倫はロシア皇帝ニコライ2世の戴冠式に参列する伏見宮貞愛(さだはる)親王の随従として参加。
明治 31 年(1898 年)		頼倫が当主徳川茂承の許しを得て家人に命じ家蔵の書物の整理、図書館設立の準備に着手。
		邸内の一隅、北西部分約1,460坪を敷地とし、建設計画。
	11月	起工
明治 32 年(1899 年)	12月	竣工(旧館木骨瓦張り漆喰塗りの西洋館)
明治 32 年(1899 年)		徳川頼倫が日本初の西洋式図書館として南葵文庫を開庫。
明治 35 年(1902 年)	4月12日	開庫式
明治 41 年(1908 年)	10月10日	徳川頼倫侯爵邸の一部に設置された南葵文庫一般公開
大正 3 年(1914 年)	2月	頼貞ケンブリッジ大学に入学して音楽理論を学ぶ。
		文庫員を図書館視察のために海外派遣(イギリスの大学での図書館学聴講、英・仏・ベルギー・蘭・米各地の図書館を巡歴)。
大正 6 年(1917 年)	3月24日	音楽堂 起工
	5月	頼貞、ロンドンのオークションにかけられた「カミングズ・コレクション」を落札し、「南葵音楽文庫」に収める。
大正 7 年(1918 年)	7月30日	音楽堂 竣工
	10月27日	南葵楽堂落成開堂式
	10月27・28日	第1回演奏会
	11月9・10日	大礼(祝賀)記念館における第1回講演会 開催。
大正 9 年(1920 年)	10月	パイプオルガンが完成。
	11月22・23日	パイプオルガンの披露演奏会の開催。
大正 12 年(1923 年)	9月1日	関東大震災 発災 南葵楽堂は修復不可能となるほど倒壊。
	12月	ほとんどの蔵書を消失した東京帝国大学に南葵文庫の総てを寄附することを公表。
大正 13 年(1924 年)	5月31日	南葵文庫閉鎖
大正 14 年(1925 年)	5月31日	頼倫 死去
昭和 3 年(1928 年)	12月1日	東京帝大の図書館が完成し、落成式を行う。南葵文庫からの書物の移送も完了。
昭和 8 年(1933 年)	11月	南葵文庫跡地に、鉄筋コンクリート3階建ての麻布麻中尋常小学校(現在の麻布小学校)の校舎が完成。
		南葵文庫旧館は、徳川頼貞の別邸として大磯の旧紀州藩領内に移築され、VILLA DEL SOL(太陽の館)」と名付けられる。
昭和 11 年(1936 年)	11月	松浦武四郎の一畳敷の建物は茶室と共に山田敬光によって三鷹へ移築された。
昭和 18 年(1943 年)	11月	VILLA DEL SOL、旧野村財閥の創始者野村徳七の手に移る。
昭和 29 年(1954 年)	4月17日	頼貞 死去
昭和 42 年(1967 年)	3月	上野松坂屋にて、カミングス・コレクション一般公開。
昭和 50 年代		VILLA DEL SOL、建物の老朽化が進み、取り壊されることになったが、熱海伊豆山温泉の旅館「蓬萊」の女将古谷青遊が旅館別館として移築することを決断。

南葵楽堂については大震災で倒壊し、修復不可能とされるほどの被害をうけた。頼貞は再建を断念し、パイプオルガンは東京音楽学校に寄附され、同校の奏楽堂に設置された。

平成28年(2016年)現在、奏楽堂は改修中のため閉館している。平成30年(2018年)を開館目処としている。

南葵音楽文庫は昭和8年(1933年)、慶應義塾図書館へ委託され、後に日本近代文学館で昭和45年(1970年)から7年間公開された。現在は読売日本交響楽団所蔵(非公開)となっている。平成18年(2006年)から平成20年(2008年)にかけ、慶應義塾大学のデジタル・メディアコンテンツ統合研究機構により、貴重書のデジタルアーカイブ化や資料研究が進められ、貴重な資料の一部が同大学のウェブサイトで一般公開されている。

南葵文庫の裏庭に建てられた松浦武四郎の一畳敷の建物は、震災の被害を免れ無傷で残り、代々木上原の新徳川邸内に移築された。日本中の歴史的建造物の古材を使った茶室を建てようと頼倫は考えていたが、頼倫が死去し完成を見ることは無かった。「高風居」と名付けられたその茶室は後に三鷹へ再び移築され、現在は国際基督教大学において「泰山荘」の一部として保存されている。



平成27年(2015年):高風居

参考サイト:『南葵音楽文庫』(読売日本交響楽団) <http://yomikyo.or.jp/nanki/>
 『麻布飯倉 南葵楽堂の記憶』(音楽フロンティアみなと 再発見コンサート実行委員会) <http://nankigakudo.blog60.fc2.com/>
 『南葵音楽文庫資料紹介 「南葵文庫附属御大礼奉祝記念館大風琴」』(篠田大基) <https://note.mu/hshinoda/n/n8a02f80dffdc>
 『南葵音楽文庫の出版活動』(篠田大基) <https://note.mu/hshinoda/n/nc4a6a85d3340>

旧鍋島邸 — 移築され、今に伝わる近代和風建築①



平成28年(2016年):ロシア大使館

和館の1階には座敷や台所が配され、廊下と縁側が周囲をまわっている。

2階には上座敷にあたる24畳の大広間と12畳の次の間が配されており、両者を囲むように設けられたガラス戸の入った縁側には、腰高の高欄手すりが付されている。

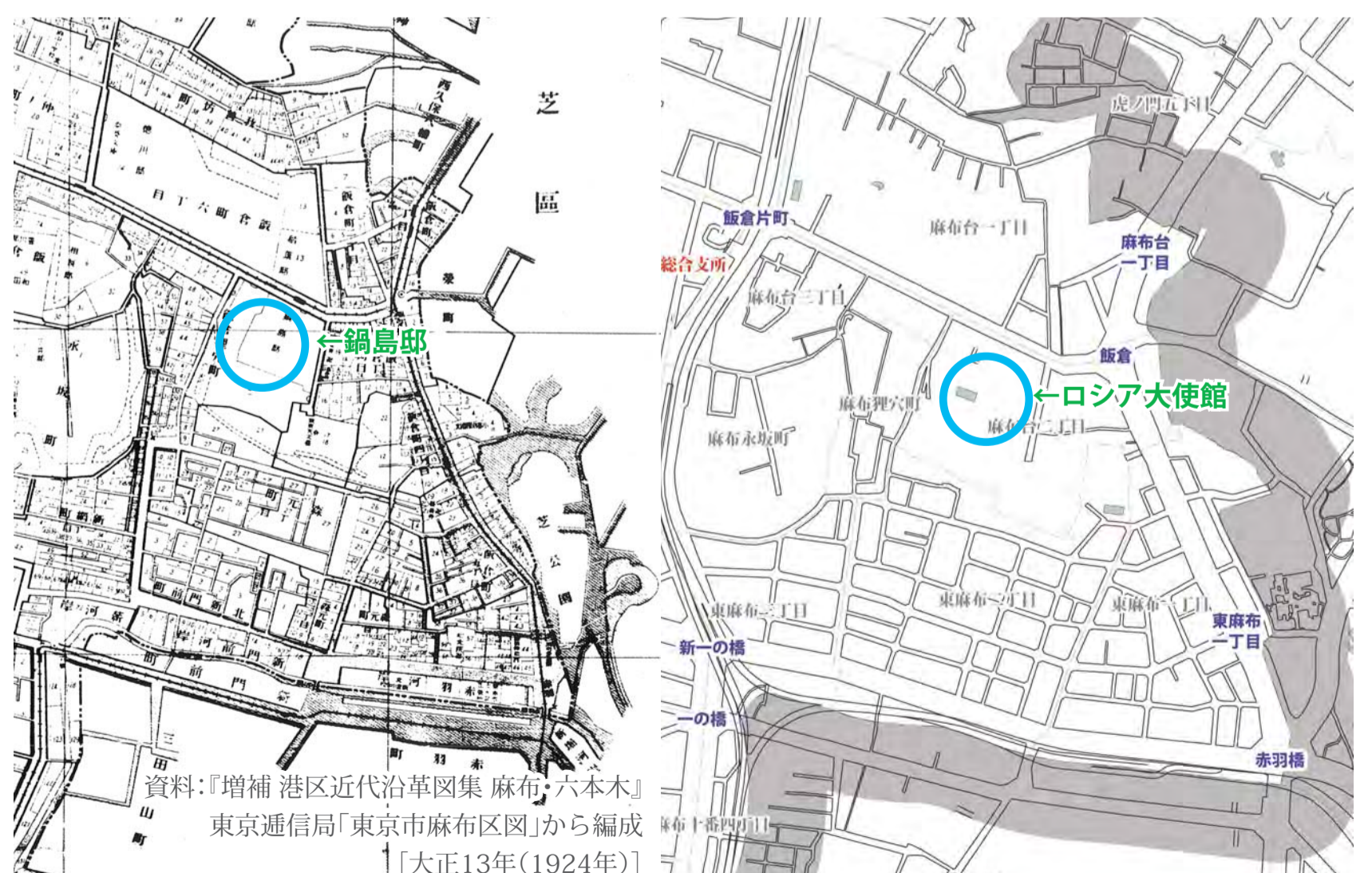
2階の大広間と次の間は天井が高く、飯倉狸穴町時代、鍋島家では畳に絨毯を敷き、椅子とテーブルを置いて、和室でありながら洋風の接客をしていたと伝えられる。敷地は高台にあたり、当時、2階からは東京湾まで見渡せるほど見晴らしが良かったという。



昭和4年(1929年):妙壽寺への移築から2年後の和館手前の平屋建て部分は移築の際に足されたもの



平成28年(2016年):
飯倉交差点から高台のロシア大使館を望む



かつては東京湾を望むことができたという高台。区画に大きなちがいはないが、ビルが建ち並ぶ現在、その環境は大きく変わっている。

旧鍋島邸 — 移築され、今に伝わる近代和風建築②



平成28年(2016年):旧鍋島邸・妙壽寺客殿全景
手前の平屋建て部分は移築の際に足されたもの

鍋島家から和館を譲り受け、昭和2年(1927年)に移築した妙壽寺は、関東大震災当時、深川猿江町(現江東区猿江)に所在。一帯は甚大な被害を受け、妙壽寺は本堂をはじめすべてのお堂を焼失。烏山の地に移転し再建にとりかかったのは、震災の年の12月であったと伝えられている。当初、和館は庫裡として移築されたが、本堂の役割も果たすなど、再建の第一歩を築いた建物であった。

その後、東京大空襲の戦火をもくぐりぬけた建物は、長らく庫裡として使われたのち、平成7年(1995年)、庫裡を別棟で新築して以後、今日まで客殿として使用されている。妙壽寺客殿は明治時代中期の和風建築の面影を残す貴重な建物として、平成20年(2008年)、世田谷区指定有形文化財に指定された。



平成28年(2016年):
南西から見た旧鍋島邸・妙壽寺客殿



平成28年(2016年):空と木々を映すガラス戸



平成28年(2016年):2階、高欄つきの縁側



平成28年(2016年):
2階の縁側からガラス戸越しに見る
木々の緑



平成28年(2016年):妙壽寺山門

※「妙壽寺客殿」は通常非公開です。

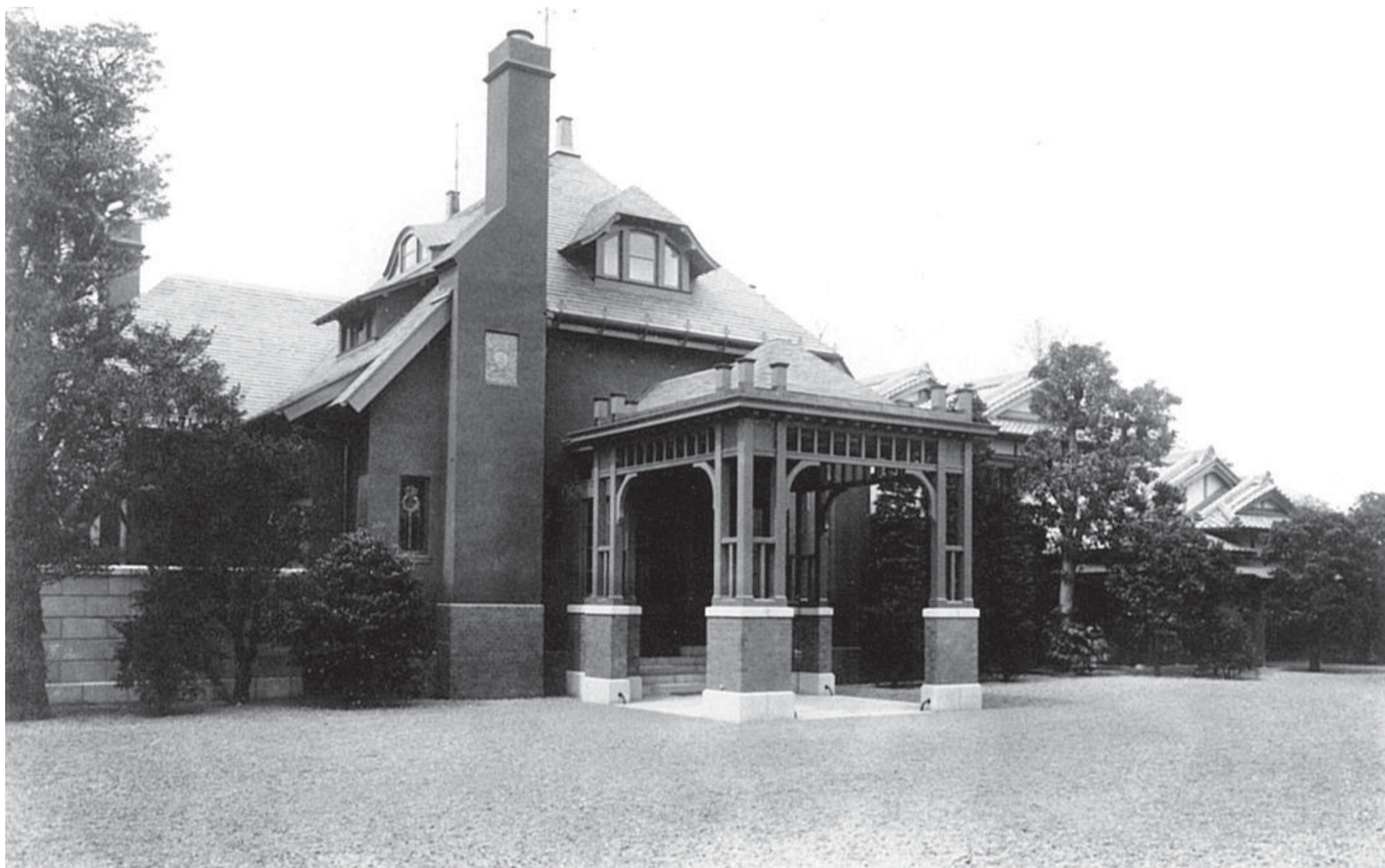
参考文献:『妙壽寺客殿—旧鍋島邸について』(法華宗妙壽寺)
『せたがやの文化財 No.021』(世田谷区教育委員会事務局)

住友家麻布別邸から泉ガーデンへー今に生きる庭園の緑①

六本木一丁目の再開発により、平成14年(2002年)に誕生した新しいまち、泉ガーデン。

地下鉄南北線六本木一丁目駅に直結する高層オフィスのビルのにぎわいを後に、斜面をのぼり、尾根部にあがると、そこには閑静な緑地が広がっている。

日々、人びとが往来するこの緑地は、かつて住友家麻布別邸が所在した場所である。



住友家麻布別邸正面玄関



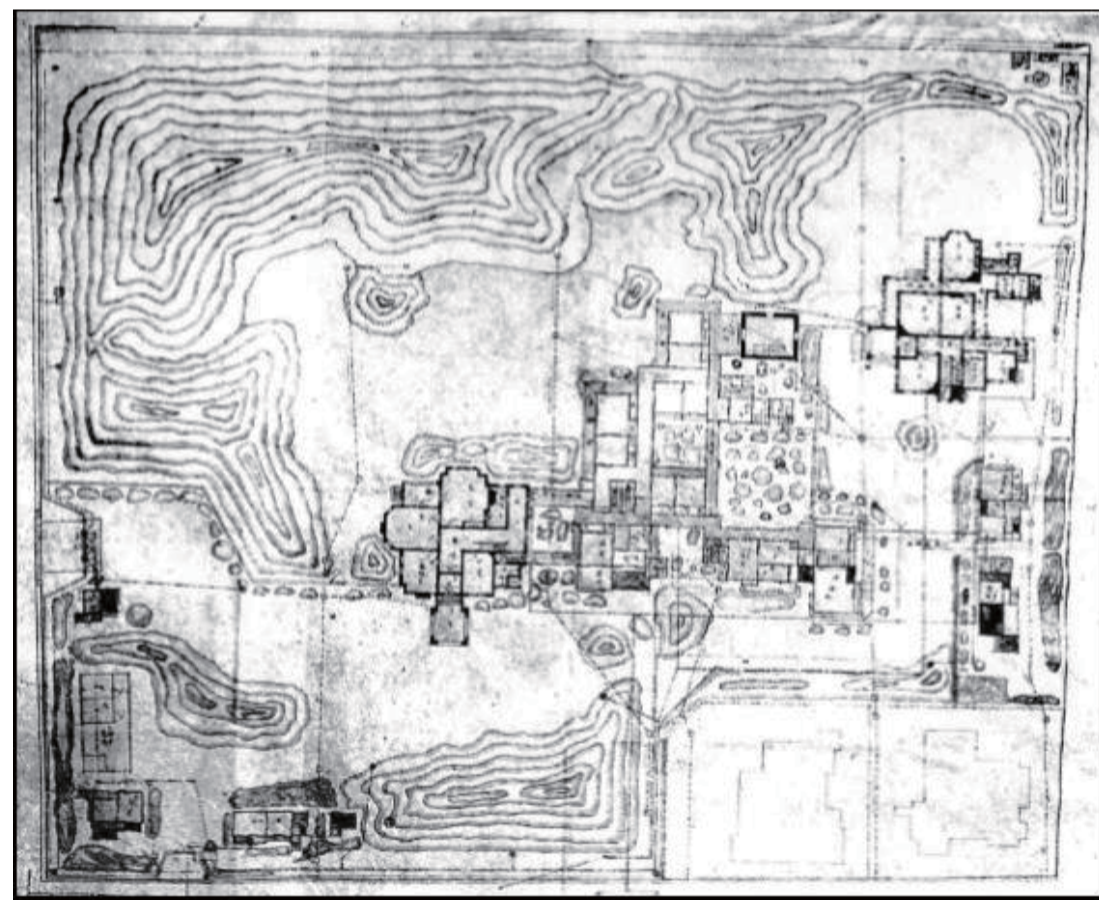
住友家麻布別邸応接室

緑地やスペイン大使館などが面する通称「尾根道」一帯は、江戸期には武家屋敷があり、明治以降近年まで緑豊かで閑静な大邸宅街であった。

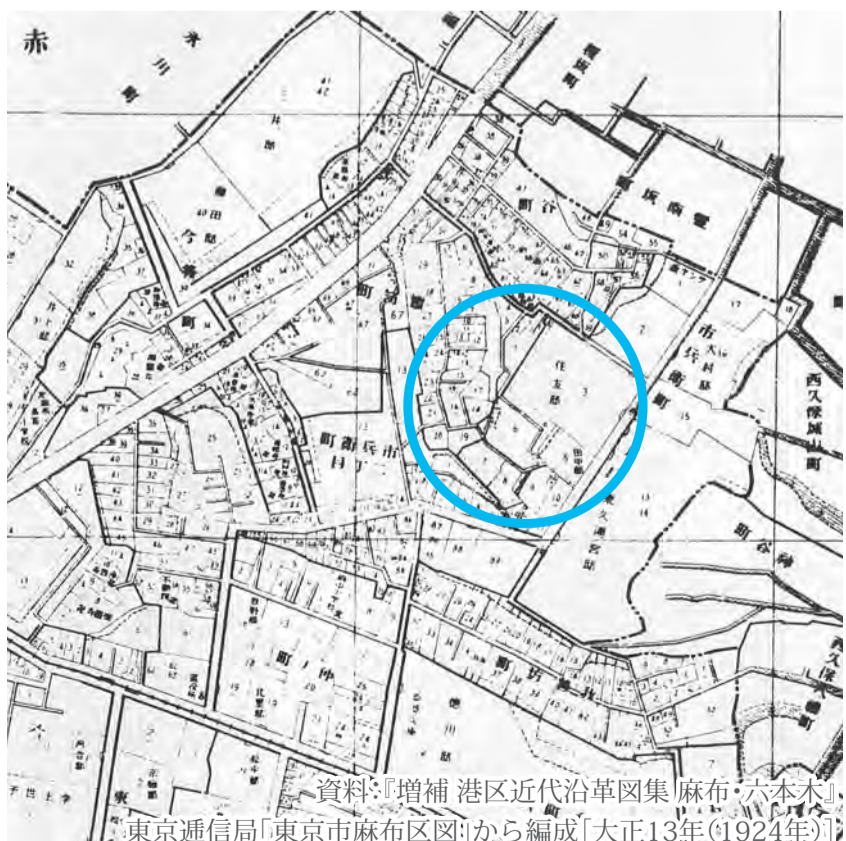
住友家第15代当主・住友吉左衛門友純(男爵・住友合資会社社長、号春翠/以下、春翠)がこの地、麻布市兵衛町(当時)に別邸を建てたのは大正6年(1917年)のことで、同年5月には、当時の総理大臣・寺内正毅はじめ財界人を招き、園遊会を開いたとの記録が残されている。

春翠は当主として住友家を近代財閥へと導く一方、公私にわたり文化活動に力を注ぎ、多彩な美術品を蒐集。邸内には春翠の美意識にかなったさまざまな美術品が飾られていたという。

大正12年(1923年)9月に起きた関東大震災を乗り越えた別邸は、大正15年(1926年)3月、春翠がこの世を去ったのちも、長らく台地にたたずみ続けた。



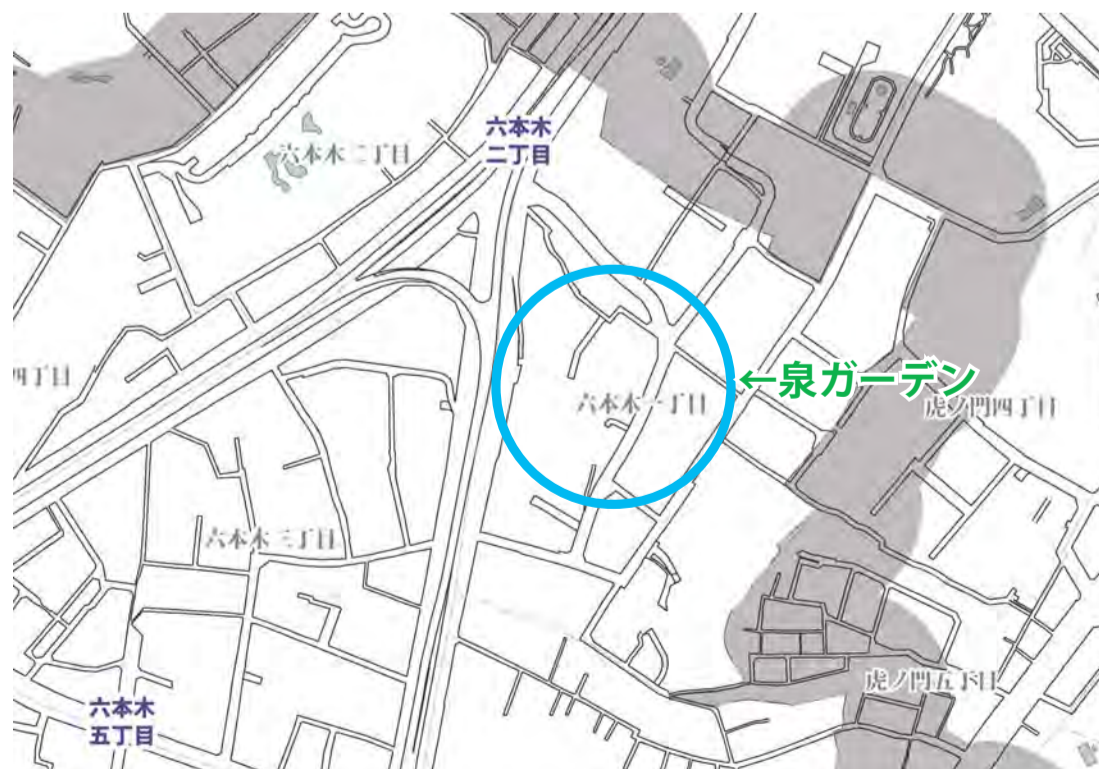
住友家麻布別邸平面図



資料:『増補 港区近代沿革図集 麻布・六本木』
東京通信局「東京市麻布区図」から編成[大正13年(1924年)]



資料:『増補 港区近代沿革図集 麻布・六本木』
植野録夫「港区詳細図」から編成[昭和22年(1947年)刊]



参考文献:『日本の建築[明治大正昭和] 5 商都のデザイン』(三省堂)、『明治・大正の邸宅 清水組作成彩色図の世界』(柏書房)、『没後50年 板谷波山展』(毎日新聞社)、
『住友春翠——美の夢は終わらない』(公益財団法人泉屋博古館)

このパネルに掲載されている古い写真と中段平面図について、『建築工芸叢誌』より転載

【麻布未来写真館】

住友家麻布別邸から泉ガーデンへー今に生きる庭園の緑②



再開発に伴い取り壊される旧住友会館



住友麻布ハイツアパート(写真右側)



昭和42年(1967年):
住友麻布ハイツアパート
(写真左側。手前は建設中の谷町JCT)



平成24年(2012年):尾根部に広がる泉ガーデンの緑地

その後、太平洋戦争の戦火をもくぐりぬけた麻布別邸は、昭和20年(1945年)、空襲により建物の一部が焼失。昭和40年(1965年)には、跡地に迎賓施設として旧住友会館が建てられ、同会館に隣接する形で住友麻布ハイツアパートが竣工。

旧住友会館、住友麻布ハイツアパートは、昭和から平成にかけての再開発に伴い取り壊された。

現在、尾根部に広がる緑地は、再開発に際し、住友家麻布別邸から旧住友会館へと受け継がれてきた庭園の緑を保全活用したものである。

閑静な緑地の一角には、平成14年(2002年)より住友家が蒐集した美術品を保存、展示する京都の美術館、泉屋博古館の分館がたたずんでいる。



平成28年(2016年):
泉屋博古館分館



平成29年(2017年):尾根道と緑地の木々(写真中央)
東京倶楽部の手前から霊南坂方面に向かって撮影



平成18年(2006年):尾根道と緑地の木々(写真右側)



昭和57年(1982年):
尾根道と旧住友会館の
庭園の木々(写真右上)

参考サイト:「開かれたまちづくり 泉ガーデンの誕生 六本木一丁目西地区 第一種市街地再開発事業」(株式会社日建設計)

<http://www.urca.or.jp/chousa/kikanshi/101roppongi.pdf>

「SPACE MODULATOR REPORT-4 泉ガーデンタワー 天に向かって輝くタワー」(日本板硝子株式会社)<http://glass-catalog.jp/pdf/spm4.pdf>

このパネルに掲載されている古い写真について/写真提供:住友史料館(上段左及び中)、東京都(上段右)、港区立港郷土資料館(下段中及び右)

【麻布未来写真館】